Vol.20-1 2012.8.24

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

CONTENTS

スポット 2
ミュージアムの収蔵品53
レコード「露營の歌」

巻頭つれづれ 3
福島県二本松の母校を訪ねて
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより 5
「命」の素晴らしさを祝う「平和」への歩み
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館副総長<国際担当>・立命館大学副学長〕

ここが見どころ 7
規律訓練型権力と従順な身体
―ミシェル・フーコー『監獄の誕生』を読む
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

運営委員リレー連載 8
ヨーロッパの「平和のための博物館」を訪問して
立命館大学国際平和ミュージアム平和教育・研究セクター長
山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕

ミュージアムおすすめの一冊 10
戦友会研究会 著
『戦友会研究ノート』（青弓社　2012年3月刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
赤澤 史朗〔立命館大学法学部教授〕

ミニ企画展 11
開催報告（2012年2月～7月）

事業報告 12
- 2012年度春季特別展　放射能と人類の未来
- ミュージアム開設20周年記念事業
- チャレンジ体験受け入れ
- インターンシップ受け入れ

17
祝！来館80万人達成

18
- 甲州市立塩山中学校見学と平和集会
- 2011年度 資料・図書など寄贈者一覧
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第4回　沖縄県平和祈念資料館
- ボランティアガイド活動日誌
  立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 村尾 孝
- 平和へのメッセージ―常設展示見学者の感想―
- 2011年度入館者状況（2011年4月～2012年3月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

レコード「露営の歌」

レコードは、19世紀にヨーロッパで発明され、日本では、1920年代に国産の蓄音機やレコード会社の増加とともに次第に普及していきました。それは、当時国内で普及が進んでいたラジオと同様、全国どこででも同じ音声を聞くことができる強力なメディアの登場でした。そのことで教育や娯楽の幅が広がりましたが、効果的にメッセージを伝える装置として社会を統制する側もこれに着目しました。

1930年代、社会全体が戦争のために動かされていく中で、ラジオやレコードから流れる流行歌もまた、国民の精神を動員するための手段として利用されました。不適切とされた楽曲は規制され、戦意を高揚する楽曲を大量に生産、演奏するよう制作から上演まで統制されていきました。

1934年に内務省警保局図書課によるレコードの検閲が始まり、1936年に当時流行していた渡辺はま子の「忘れちゃいやよ」が発売禁止となりました。この歌を現在聞くと特別な問題は感じませんが、歌の中に「ねぇ、ぇ」「いやぁよぉ」と鼻から息を抜くような発声があり、これがエロと禁止されました。

1937（昭和12）年に盧溝橋事件をきっかけに日中戦争がはじまると国民精神総動員実施要綱が作られ、戦意高揚に向けた思想や文化が奨励され、そうした楽曲も多数発表されました。その一つが『露営の歌』です。新聞社が懸賞募集した詞に古関裕而が曲をつけたものです。古関は当時すでに早稲田大学や慶應義塾大学、阪神タイガースなどの応援歌をつくり活躍していました。作詞の藪内喜一郎は当時京都市役所に勤務していました。

十五年戦争当時、新聞社や出版社、公的な機関は軍歌やスローガンを盛んに募集しました。公募にすれば確実に量産できます。また、公募にして標語や詩を考えさせることで、国民を積極的に参加させる機能もありました。

『露営の歌』は発売後半年で60万枚を売り上げる大ヒットとなり、京都・嵐山には松井石根（陸軍大将）の筆による歌碑も作られました。

「露営の歌」

作詞：藪内喜一郎　作曲：古関裕而

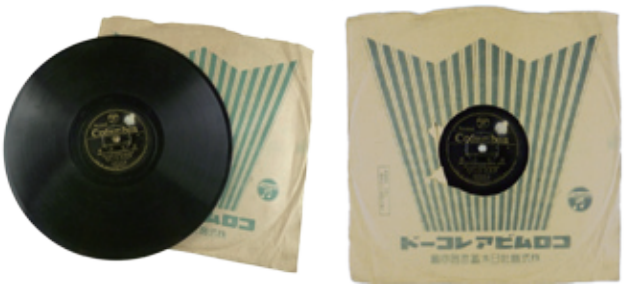
勝つて来るぞと勇ましく、
誓って国を出たからは、
手柄立てずに死なれよか。
進軍ラッパ聞くたびに、
瞼に浮かぶ旗の波。

土も草木も火と燃える、
果なき曠野踏み分けて、
進む日の丸鉄兜、
馬のたてがみ撫でながら、
明日の命を誰か知る。

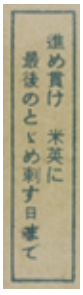
弾丸もタンクも銃剣も、
暫し露営の草枕、
夢に出て来た父上に、
死んで還れと励まされ、
覚めて睨むは敵の空。

思えば今日の戦いに、
朱に染まってにっこりと、
笑って死んだ戦友が、
天皇陛下万歳と、
残した声が忘らりょか。

戦争する身は予てから、
捨てる覚悟で居るものを、
鳴いてくれるな草の虫、
東洋平和の為ならば、
なんの命が惜しかろう。



コロムビアから発売された「進軍の歌」／「露営の歌」のレコード
寸法：直径　25cm　　発行者：コロムビアレコード
年代：1937（昭和12）年
＊袋は1937年の発売時よりも後のものです



やがて、レコードの袋にも
時局を表す標語が
掲載されるようになりました

詩の内容は、大陸への軍事侵略を肯定するものですが、哀愁を帯びたメロディーは日露戦争の際に流行した『戦友』を思わせるところがあります。戸ノ下達也によれば、ヒットの背景には「勇壮活発な楽曲よりも死をテーマとした悲壮感漂う、また物語性を好む大衆の感情」に訴えたことがありました。この歌は公募の2等でレコードのB面曲として発売されました。A面は1等であった行進曲調の「進軍の歌」でしたが、B面の「露営の歌」がこれを超える人気になったということです。

（学芸員　兼清順子）

参考文献

戸ノ下達也著『音楽を動員せよ：統制と娯楽の十五年戦争－』（2008年、青弓社）
堀内敬三著『定本 日本の軍歌』（1969年、実業之日本社）

福島県二本松の母校を訪ねて

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長　安 斎 育 郎
（立命館大学名誉教授）

津波被災地を見る

2012年7月1日、宮城県母親大会の記念講演のため、塩竈市を訪れました。講演のテーマは「原発問題」。会場となった月見が丘小学校の放射線レベルは0.05～0.08マイクロシーベルト／時程度で、京都駅近くの私の事務所の自然放射線レベルよりもずっと低いのですが、原発事故がもたらした不安はとても大きく、参加したお母さんたちの心配は深刻でした。

もちろん、隣の福島県には今も放射線のレベルが高いところがありますし、食品の放射能汚染もまだまだ目を離せません。20世紀初頭にフランスのジャン・ベルゴニーとルイ・トリボンドーが発見した「分裂頻度が高く、未分化な細胞ほど放射線感受性が高い」という法則を引用するまでもなく、子どもは大人よりも放射線の影響を受けやすいことはよく知られており、1954年以来、「生命を生み出す母親は、生命を育て、生命を守ることを望みます」という理念を掲げる母親大会であれば、当然といえば当然のことでしょう。

記念講演のあと、津波被害を受けた宮城県の七ヶ浜を訪れました。写真のように、今なおスクラップとなって堆く積まれている車両や背景のガレキの山を見るにつけ、津波の脅威のただならぬ恐ろしさを教えられます。細部にわたってひん曲げられ捻じ曲げられた車体を前に、いったいどうすればこんな力が加わるのだろうかと、思案投げ首。ほんに、自然の脅威は恐しい。

宮城県七ヶ浜付近のガレキ（2012年7月1日）

二本松の寿司屋での会話

翌7月2日の夕方はいわき市での講演ということで、それまでの間を利用してわが故郷の町・二本松を訪れることにしました。私は1940（昭和15）年に東京の下町・亀戸で9人きょうだいの末子として生まれましたが、すでに3人は私が生まれる前に亡くなっていましたし、4人の兄は私が物心つかないうちに出征していきましたので、家には父母とすぐ上の兄しかいませんでした。1944（昭和19）年、都市空襲が激しくなると、父親の判断で父母の郷里福島県に縁故疎開することになり、安達郡二本松町（現・二本松市）に移り住んだのです。1945年3月10日の東京大空襲に遭っていたら、一家全滅だったに相違ありません。亀戸の家は、現在の東京大空襲・戦災資料センターから2キロ程のところでした。

戦争の思い出といえば、夜空にうごめく幾筋もの探照灯（サーチライト）の不気味さとか、雨が降る中を母親に背負われて赤土の防空壕に逃げ込んだとか、暗い、じとじとしたイメージしか残りません。幼子は戦争の大局など知る由もなく、貧困な生活の中でも自然と戯れてそれなりに楽しく育ちました。

1947（昭和22）年、私は二本松小学校（現・二本松南小学校）に入学しましたが、戦争の影響で先生は女性が多く、あまりちゃんとした教科書もなく、文房具も十分ではありませんでした。当時私がつけていた絵日記帳は、兄が何かの裏紙をきれいに製本して作ってくれたものでした。物質的には貧困な生活でしたが、野山を飛び回り、桑の実や野イチゴを食べ、ドジョウやイナゴを追うとても生き生きとした日々でした。豊かな自然と触れながら育ったことは、私が合理的な思考法を身につける上で非常に大切な役割を果たしました。自然は豊かな観察の場であり、自由な実験場でもありました。

そんなことを懐かしく思い起こしながら、7月1日の夕方は二本松駅の周辺を散策しましたが、その道すがら一冊の本のポスターを目にしました。最近、佐藤栄佐久・前福島県知事が書いた『福島原発の真実』（平凡社新書）という本です。ポスターには「事故は決し

て“想定外”ではなかった。国が操る『原発全体主義』の病根を前知事が告発！」とあります。佐藤氏は、当初、「プルサーマル計画」（現在の軽水型原発でプルトニウムを燃料として用いる計画）を了承しましたが、東京電力のトラブル隠しが発覚するや了承を撤回、その後は国の原発政策を批判してきました。ポスターを見て、「ついにそこまで書いたか」という感じがしました。たまたま入ったお寿司屋さんでもそのことが話題になり、親切なことに後日私に1冊送ってくれることになりました。

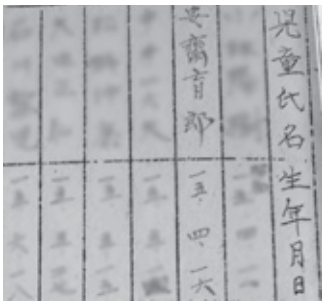
母校の校長先生と懇談

翌7月2日の午前中、私は65年ぶりに母校の小学校へ向かいました。校門の近くには「除染をしています」という標識が立てられていましたが、校庭の放射線量率計は福島市の渡利地区の保育園と同じくらい（0.36マイクロシーベルト／時程度）のレベルを示していました。事故から1年4ヶ月経っても、母校の後輩たちが心開いて自由に校庭で遊ぶ条件を奪われていることに、あらためて原子力工学の専門家としての責任を痛感しました。せめて、放射線防護学の専門家として、被災地の子どもたちの命を紡ぎ出すために少しでもお手伝いしたいものだと、心から思います。

さて、私は「校庭をうろつく不審者」に見えたに相違ありません。やがて、校長先生がニコニコと近づいてきました。65年前の在籍者で、放射線防護学を専門としていることをお伝えしたところ、長靴姿の小林淑人先生は、剥離した表層土などが積まれた構内の裏手を辿って、気安く校長室に導いてくれました。学校の様子などを伺い、学校と保護者と地域が共同して子どもたちのための安全な環境づくりに努力している様子を話してくれました。

二本松南小学校の小林淑人校長先生と（2012年7月2日）

私は、ふと、私が間違いなく二本松小学校に在籍していた証を確かめたくなりました。校長先生に無理をお願いしたところ、しばらくして『自昭和二二年度至昭和二四年度修業台帳　福島縣安達郡二本松町立二本松小學校』という綴りを資料庫からお持ちになり、私の誕生日「昭和15年4月16日」を手がかりに一緒に探してくれました。名前は苦もなく見つかりました。私は確かに在籍していました。



小学校3年まで在籍した私は、やがて両親とともに東京に移り住み、結局、東京大学工学部原子力工学科第1期生となったものの、日本の原発開発政策に疑問を抱き、失望し、今からちょうど40年前の1972年12月、日本学術会議主催の第1回原子力発電問題シンポジウムで「六項目の点検基準」を提起、国の原発政策を徹底的に断罪しました。翌73年9月には、福島市で開かれたわが国初の住民参加型原発公聴会に地元住民推薦枠で出席し、ここでも政策批判を展開しました。公聴会の様子をテレビで見た福島の親戚筋は、私のことに気づいたようです。折からの第四次中東戦争を皮切りに石油ショックが日本を襲い、田中角栄首相の下で「電源開発促進税法」が立法されて、日本の電力生産は原発へ原発へと大きく舵を切っていきました。1960～70年代の日本は高度経済成長によって大電力を必要とするようになりましたが、大気汚染公害の激化もあって火力発電の拡大には根強い反対の声がありました。そこに、「クリーンな原子力」が喧伝されました。おまけに、日米の貿易収支の不均衡を是正するため、アメリカから日本への濃縮ウラン輸入枠が拡大され、アメリカ型軽水炉原発の拡大に道を開きました。二本松で幼少期を過ごした安斎育郎君が、福島を舞台に展開された原発ラッシュに批判者として関わり、その政策が破綻したいま福島の子どもたちに心寄せながら、これからの命を紡ぎ出すお手伝いをしようとしている―そう考えると、何か因縁めいたものを感じます。二本松南小学校の子どもたちの絵や作文を、国際平和ミュージアムのミニ企画展示で紹介できないか―そんなことを思いながら、次の講演地であるいわき市に向かったことでした。

「命」の素晴らしさを祝う「平和」への歩み

立命館大学国際平和ミュージアム
館長　モンテ・カセム
（立命館副総長<国際担当>・立命館大学副学長）

「光り輝く島」スリランカ

国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム

1972年に来日して、40年になります。青年時代のスリランカを振り返ってみると、母国のことを懐かしく思い出します。「スリランカ」は、シンハラ語で「光り輝く島」という意味でして、インド亜大陸の南東に位置する島国でセイロン島とも呼びます。島の大きさは北海道の約80パーセント、人口は約2060万人の国です。

スリランカの民族は、シンハラ人（72.9％）、タミル人（18.0％）、スリランカ・ムーア人（8.0％）。宗教は、仏教徒（70.0％）、ヒンドゥ教徒（10.0％）、イスラム教徒（8.5％）、ローマン・カトリック教徒（11.3％）で構成されています。（引用：外務省ホームページ）その「光り輝く島」は、植民地政策と内戦によって、長年苦しんできました。

1921年、英国の植民地でありながら、対話と交渉の下で「７割の自治」が誕生したといわれています。1931年、アジア初の普通選挙法が施行され、男女平等に選挙権を与えました。1948年、英国連邦内の自治領から独立し、植民地から自由になった市民の意識は高いものでした。1951年、サンフランシスコ講和会議において、セイロン代表として会議に出席していたジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ蔵相（後のスリランカ大統領）は、「日本の掲げた理想に、独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい。憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む」という仏陀の言葉を引用して、対日賠償請求を放棄する演説を行ったことは有名な話です。1960年、世界初の女性首相、シリマヴォ・バンダラナイケ氏もこの国から誕生しました。そのときに、新憲法を制定、国名をセイロンからスリランカ共和国と改め、イギリス連邦自治領からイギリス連邦加盟の完全独立国となりました。1977年5月の総選挙で、バンダラナイケ政権から変わったジャヤワルダナ首相は、議院内閣制から大統領制に移行し、1978年2月初代大統領に就任しました。同年9月新しく民主社会主義憲法を公布し、現在のスリランカ民主社会主義共和国を国名としました。

スリランカの内戦と失われた命

スリランカは、真に平和な社会だったように見えました。しかし今思うと、その時も暴力の構造が見え隠れしていたのです。1956年、ソロモン・ダイアス・バンダラナイケ首相（シリマヴォ・バンダラナイケ首相の夫で、1959年9月暗殺）が就任し、シンハラ語のみを公用語とする公用語法が成立しました。この政策によってタミル人との対立が高まり、後の大規模な民族対立の原因となっていきます。その後、1987年憲法を改正し、シンハラ語及びタミル語を公用語と規定、州評議会制度を導入しました。

私は、「我々に希望への道がない、坊や」という芝居を思い出します。このシンハラ語の芝居は、英語を上手に話す人を優遇する社会構造と、現地語しか話せない人々の悔やみを描いていました。私は、スリランカの内戦の根本の原因は、政府の言語政策の誤りにあると考えています。

だがその政策の誤りが持つ意味に気づかず、1970年代から若者ゲリラに社会が振り回されるようになります。私が来日する１年前の1971年、多数派のシンハラ族を中心に、不満を持つ若者がスリランカ人民解放戦（JVP）の下で暴力を行使し始めました。その後、1983年以降25年以上にわたり、スリランカ北・東部を中心に居住する少数派タミル人の反政府武装勢力である「タミル・イーラム解放の虎（LTTE)」が、北・東部の分離独立を目指して活動し、政府側との間で内戦状態となりました。その後、両民族のゲリラ軍によってスリランカは武力紛争にさらされ、この内戦で若い青年をはじめ数万人の命が消えました。

そうした背景の下、一個人としての私の体験を語りたいと思います。私は、NGO団体「自立のための道具の会：(TFSR,Tools For Self Reliance)」に協力する日本の職人たちと、1983年から最貧の村を訪問し、地元の職人と共に小規模発電所や水の浄化装置、雨水利用の溜池や家庭用飲料水装置等を建設していました。1990年代の半ばにLTTEのゲリラと出会いました。「あなた方が村で造った施設に間違って爆弾を落としてしまった。また造り直せないか？」と頼みに

来たのです。やり取りの最中に、道の反対側に政府軍兵士が出てきた。ゲリラと政府軍兵士がお互いに怯えると私は思ったのですが、彼らがお互いに黙認しているのを見て、ちょっと親しくなっていたゲリラに、「お前は彼をやっつけることで給料もらっている。彼もお前の退治は職務と思っているはず。なぜお互いにさぼっているのか？」と聞いてみました。「彼も私も死にたくないね」とさりげなく答えたのを私は心に刻み、末端の兵士たちの本音を表しているものかと思いました。

その十年後、ゲリラと政府両者の許しを得て東部地域を調査していた時、道に迷ってしまい、行き止まりに辿り着きました。日没後の薄明かりの中で私が見たものは、若者400人のお墓でした。十代と二十代の失った命の代わりに建つ冷たい白い墓石を見て、ただただ無言に手を合わせたことを覚えています。友であろうが敵であろうが、若い命が消えることは誰の心にも訴えるものだと思いました。

2002年2月にノルウェー政府の仲介により停戦合意が成立し、6回の和平交渉が行われましたが、2006年7月に双方の武力衝突が再燃し、停戦が崩壊しました。政府軍はLTTEを徐々に追いつめ、2009年ようやく日常化されていた武力構造が崩れました。同年5月19日、ラージャパクサ大統領が議会で戦闘終結を宣言しましたが、この内戦で7万人以上が犠牲となったといわれています。

平和への「道」と国際平和ミュージアムの役割

内戦終結後、ラージャパクサ大統領は約29万人ともいわれた国内避難民の再定住を進め、現在難民キャンプに残る数は約６千人まで減っています。社会に戻された彼らのアイデンティティを尊重したうえで、社会の一員として今後の国づくりにどう貢献するのか、もともと不満を引き起こした構造的問題の解決策の提示、具体的な実行策など、数多くの課題と直面しなければなりません。

この大事な時期を乗り超えるのに、個人の意思を尊重し、集団として健全に発展できる社会構造を戦後作り上げてきた日本から学べることは多いと思います。一人当たりGDPが2836米ドル（2011年）まで向上しているスリランカは、日本の無償援助対象外になります。円借款はまだしばらく続くでしょう。海のシルクロードであるインド洋の東西貿易路の安全を保障するために、親日国スリランカは、実に戦略的な拠点とも言えます。「東洋の真珠」と呼ばれたこの島が、再び栄えるのにどうすればよいでしょうか？

立命館大学国際平和ミュージアムは、「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむ」という理念に基づき、世界でも珍しい大学立の平和博物館として開設されました。今年4月に4代目の館長に就任したとき、我がミュージアムの高い志を、まだ平和づくりの諸課題に悩み続けている国や地域の現状にどう照らし合わせればよいかと考えさせました。母国スリランカで、長い間の内戦状況から真の平和をどう築きあげればよいかと迷っている政府や市民を見ると、これは平和ミュージアムのとても重要な役割だと感じました。人間の英知を結集し、理性の下で、平和構築の研究はこのような問題とどう取り組み、向き合うのか、これはわが立命館大学国際平和ミュージアムの課題でもあります。

今年の9月から、スリランカより国費留学生１名が政策科学研究科の大学院に入り、私の研究室で東日本大震災後の東北地域を対象に、社会的レジリエンス(弾力性、復元力)に関する研究を始める予定です。自分も若い時の博士課程の研究に東北地方の方々に大変世話になり、少しでもその役に立ちたいと思い、研究室に入る若い院生といろいろと考える機会を持っているところです。大きな出来事の後、再出発せざるを得ないときに、国際的な知の還流がどのように役立つか、この研究から見えてくればと願っています。立命館全学で執行している震災復興支援プロジェクトも、被災地の方々の新たな展開の原動力になることを願って始めた取り組みです。失った命を大事にするのであれば、残された私たちはより見事な社会を、未来の世代に向けて築くべきではないかと思います。ミュージアムの最近の企画展等でも、この精神が表れていると感じています。

様々な価値観がぶつかりあうところで、生命の尊重と生命の喜びを祝う道を根底に置けば、間違いなく明るい未来を切り開くことができるであろうと確信しています。

Monte CASSIM　プロフィール

1947年スリランカ生まれ。70年にスリランカ大学自然科学部建築学科を卒業し、国費留学生として72年に来日。東京大学工学博士号取得。日本地域開発センター研究員や国連地域開発センター主任研究員などを経て、94年に立命館大学国際関係学部教授、政策科学部教授、2004年に立命館アジア太平洋大学学長（～2009）・学校法人立命館副総長。2012年に立命館大学国際平和ミュージアム館長に就任。専門分野は環境科学、産業政策、国土計画、都市工学、建築学。今、環境科学と医療情報学を中心にサステーナビリティ・サイエンスの研究とオープン･イノベーション促進の研究開発に夢中。

規律訓練型権力と従順な身体―ミシェル・フーコー『監獄の誕生』を読む

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長　加國尚志
（立命館大学文学部教授）

国際平和ミュージアムでは、地階展示で十五年戦争の時期の「兵士と軍隊」のあり方について展示を行っています。戦争は、何よりも兵士によって戦われるのであり、したがって戦争を維持する兵力としての兵士を育成することが戦時下の教育の最大の目標になります。そして、兵力として優秀な兵士を「選別」するのが「徴兵検査」であったことは言うまでもありません。成人男性の身体が敵を殺戮する「兵力」として見積もられ、検査され、選別されていったのが「徴兵検査」でした。展示されている写真を見れば、そこでは人間の身体は、兵士としての機能に分類され、言わば一箇の兵器として扱われていたことがわかるでしょう。戦時下では、人間の身体は戦争への有用性の観点から判断されていたのでした。

今日の日本では「徴兵検査」などは行われていませんから、こうしたことも過去のエピソードと思われるかもしれません。しかし、観点を変えて見ると、人間の身体についての関心は、教育の場の基本的部分に存在していることがわかります。

ミシェル・フーコーは『監獄の誕生』の中で、近代国家の権力を「規律訓練型権力」と規定しています。それは直接的に人間の身体を目指し、身体の用い方を統制しようとするものでした。軍隊、学校、工場、病院等において、人間は身体の訓練を通じて、従順な人間となることを要求されるようになった、というのがフーコーの主張です。そこでは身体は細かな規則に従わせられ、そのことによって有用な身体として権力に服従する身体であることが要求されます。

近代の軍隊がそうした細かな規則に基づく「規律訓練型」権力の場であることは、想像に難くありません。整然と整列し、行進し、進軍し、攻撃する、そうした軍隊の規律が、ただ軍事訓練の場だけではなく、日常的な営みのすべてにわたって時間と空間についての細かな規則のもとに営まれることが要求されたことは、軍隊の要求するものが、より有能な兵力＝兵器としての兵士の身体であったことから考えれば、難なく理解されるでしょう。

しかし、そうした「規律訓練」が要求されるのは軍隊だけではありませんでした。フーコーは学校や工場を例に挙げています。たとえばラ・サールという教育者は、教室内の席順を細かく分類することで、生徒の能力を区別し、教室管理を効果的に行う方法を考えていましたし、19世紀の小学校の時間割はほぼ４分おきに何をなすべきかの指示が書き込まれていました。軍隊の規律と見まがうばかりのこうした細かな規則と管理に従う「従順な身体」を作り出すことが、学校教育の一つの目標であったことをフーコーは指摘しています。

それは何を意味するのでしょうか。学校が作り出す「従順な身体」は、やがては軍隊で規則に従い行動をする「有能な兵士」（兵力）となるでしょうし、工場では「有能な工員」（生産力）となるでしょう。軍事力の増強と経済的生産性向上の要求のもとで、教育は従順な身体を生み出すための「監視と処罰」の場と化していきます。教育は、さまざまな水準を定め、序列化し、規格外の者を排除する規格化の場であることになります。「規律訓練型」の権力とは「規格化」の権力に他なりません。近代の学校教育は、こうした「規格化」の権力の具体的な姿として現れてきたと言えます。

国歌や国旗といった、国家の象徴とされるものを前にして、学校教育の管理者が、そこに「規律訓練型」権力の隠れた威厳を想起し、学校教育とは従順な身体を生み出し、序列化を行う「規格化」のことなのだ、ということを意識したとしたら、それは徴兵検査や軍事教練の根本にあった思想の延長上にあったと言えるでしょう。「規格化」の実施とは「監視と処罰」に他なりません。起立をしないのは誰か、国歌を歌わないのは誰か、秩序を乱す者を「監視」し、違反者を「処罰」する。その発想は、最近になって始まったものではなく、近代と呼ばれる時代になって軍隊、工場、病院、学校という施設で身体を監視していた「規律訓練型」権力として一貫していることをフーコーの著作は教えてくれます。

「平和教育」を行うことは、まず何よりも、「教育」の中に組み込まれていた、「戦争」を行う「軍隊」と同根の権力のあり方を問い直すところから始めなくてはならないでしょう。ミュージアムに展示してある徴兵検査の写真を見るたびに、「あなたたちはあの頃と同じことをしていないと言えるだろうか」、と問いかけられているように思えてなりません。

徴兵検査（1943 年３月）　撮影／梅本忠男

ヨーロッパの「平和のための博物館」を訪問して

立命館大学国際平和ミュージアム
平和教育・研究セクター長　山 根 和 代
（立命館大学国際関係学部准教授）

「平和のための博物館」は、日本や海外の各地に存在しています。イギリスに留学中、幸いヨーロッパの平和博物館を訪問する機会がありました。ヨーロッパで印象に残った平和博物館、ヨーロッパと日本の平和博物館の違い、「平和のための博物館」の国際ネットワークと国内ネットワークについて述べてみたいと思います。なお「平和のための博物館」には、反戦博物館、平和博物館、抵抗博物館などが含まれます。

ヨーロッパの「平和のための博物館」

1992年に第1回平和博物館国際会議がイギリスのブラッドフォード大学で開催されました。目的はイギリスの国立平和博物館を建設するために、海外の平和博物館から学ぶことでした。1998年ブラッドフォードに国立ではありませんが、私立のピースギャラリーが開館しました。テーマは、非暴力、紛争解決、戦争への抵抗活動、平和運動、軍縮、国際法と国際機関、人権、環境保護などでした。展示では、反核平和運動（1981年グリーナムコモンにおいて女性の反核運動があり、米軍基地の巡航ミサイル配備に反対活動をし、最終的に核ミサイルと米軍基地を撤去させました）、地域における人種差別問題（パキスタン系イギリス人への差別問題）などに取り組んでいました。

オーストリアのシュライニングにあるオーストリア平和・紛争解決研究センターにおいて、1995年に第2回平和博物館国際会議が開催されました。その結果2001年に平和博物館が開館しました。平和の実現を目指す活動の歴史、そしてどのようにすれば平和の実現が可能であるのかを示す展示物がありました。またテーマとして、仲裁と和解を取り上げています。国際社会だけでなく、個人の日常生活においても取り上げ、いじめの問題が取り上げられていて印象的でした。

オーストリアのウルフゼックには、オーストリアで最初に建設された平和博物館がありました。1993年に元美術教師のフランツ・ドイチェ氏によって開館されました。その目的は平和教育ですが、平和博物館を「出会いとコミュニケーションの場」として位置づけていました。オーストリアにおける反戦活動や、世界の平和博物館に関する情報が展示されていました。例えば立命館大学国際平和ミュージアムのポスターや、高知市の平和資料館「草の家」から送った写真が展示されていました。

館長のドイチェ氏の言葉で印象に残ったのは、次の通りです。「平和な時こそ、平和のために活動しなければいけない。戦争が始まってからでは、遅すぎる。」「平和博物館は、展示するだけでなく、人々に平和への積極的貢献ができることを気付かせる所である。」「言うだけでなく、行動を」などです。彼はボスニア紛争の際、実際に平和博物館の地下室に難民家族を引き受けていましたが、彼の行動力が大変印象的でした。

ドイツでは1925年エルンスト・フリードリッヒ氏（1894―1967）がベルリンに反戦博物館を開館しました。彼はポツダムの帝国劇場の役者でしたが、第一次世界大戦中前線で戦う軍隊を楽しませるために前線へ送られました。しかし戦争の実態を知り、徴兵忌避の結果、監獄、そして精神病院に送られました。1925年に反戦博物館を開館したものの、1933年ナチスの迫害のため閉館しなければなりませんでした。皮肉なことにその反戦博物館で、ナチズムに反対した人々が拷問にかけられたのです。彼はベルギーへ逃げ、1936年に再び反戦博物館を作りました。しかしドイツがベルギーに侵略後、再び閉鎖をせざるを得なかったのです。彼はフランスの強制収容所に入れられましたが、逃亡してフランスの抵抗運動に参加しました。戦後彼とその家族はベルリンへ戻り、戦争中の苦しみの補償として政府から年金を受け取ったそうです。日本では元軍人にしか年金がなく、被爆者や空襲の被害者への補償はないので、ドイツと大きく異なった状況です。その後孫のトミー・シュプレー氏（教員）が、1982年に平和運動が高まる中反戦博物館をベルリンで開館されました。ドイツ政府はこの反戦博物館を支持し、財政的援助もしているそうです。反戦博物館の歴史を展示し、戦争賛美の宣伝と戦争の実態の対比を、死傷者などの写真によって示していました。広島、長崎の被爆者の写真も展示していました。そこでは核戦争になった際、着たら良いと考えられていた服の展示

もありました。台風なら役に立つかもしれないが、いざ核戦争となれば全く役に立ちそうにないビニール製の服に驚きました。原爆の恐ろしさがまだまだ伝わっていないのではないかと考えざるを得ませんでした。1999年に出版された『ベルリンでほとんど知られていない博物館』という本でシュプリー氏は「60秒ごとに150万ドル（当時約1億5千万円）が武器の製造に使われている」と指摘されていたのが印象的でした。

ベルギーのディクスミュードにはイーペル塔があり、この平和博物館は1930年に開館しました。第一次世界大戦、平和主義、フランドル解放の戦い、第二次世界大戦に関して展示していました。最初に塔の一番上にエレベーターで上り、その後下に下りながら様々な展示を見て、最後に第一次世界大戦の塹壕を通って外に出るようになっていました。毒ガスが使用されたことを知るために、毒ガスの匂いと似たものを嗅ぐことができるように工夫していました。

またベルギーのイーペルにはフランダース戦場博物館があり、1998年に開館しました。そこは第一次世界大戦の戦場で、約50万人の兵士が戦死したところです。第一次世界大戦をテーマに展示されていますが、漠然と兵士のことを知るのではなく、特定の兵士を選んでパソコンで彼の生涯について知り、その後彼の墓地へ行くような取り組みが行なわれていました。このようにして子ども達や訪問者は、具体的に戦死した兵士のことを学ぶことができるように工夫されていました。どちらの平和博物館でも感性に訴えるように工夫をしていました。

ベルギーのフランダース戦場博物館

ヨーロッパと日本の平和博物館の違いについて

ヨーロッパと日本の平和博物館の違いについて、次の点を挙げることができると思います。イギリス、オーストリア、ドイツなどでは、いじめなど身近な問題も含めた紛争解決に取り組み、平和主義者の展示、また過去の歴史を直視した展示があります。ところが日本では歴史認識、特に戦争の被害の側面を強調した展示が行なわれているところが多いようです。従って海外の平和博物館から色々学ぶべきことがあると言えるでしょう。

ヨーロッパにおいては、ナチズムへの抵抗博物館が非常に多くあります。これはドイツがどれだけ多くの国を支配したかを示しているのですが、しかしドイツの場合謝罪と補償をしています。日本の場合は個人レベルでそうしていないので、アジアにおける平和と和解のための努力が大きな課題であると思います。

平和のための博物館ネットワーク

平和のための博物館の国際ネットワークは1992年に結成されましたが、そのウェッブサイトは次の通りです。www.peacemuseums.org （英文です）
その通信の日本語版を安斎科学・平和事務所で発行していますが、読んでみたい方はご連絡下さい。（山根研究室：075-466-3763 ky5131jp@fc.ritsumei.ac.jp）

また国内の「平和のための博物館・市民ネットワーク」では、通信『ミューズ』と英文“Muse”で、海外のニュースや国内のニュースを発信しています。事務局は、名古屋市のピースあいちにあります。東京大空襲・戦災資料センターのウェッブサイト(http://www.tokyo-sensai.net/)でその通信を読むことができますが、そこの山辺昌彦研究員、安斎育郎名誉教授、そして私が編集をしています。情報量が増えてきたので、谷川佳子氏をはじめ数名の女性が翻訳をして下さっています。

最後になりましたが、平和博物館において芸術、文学の果たす役割は大きいと思います。ただ知識を増やすだけではなく、訪問者が感動して自分も平和の実現に何かしたいと考えるようになることが重要だと思います。

また世界各地、また日本各地で平和の実現のために努力している人々について知ると、大いに励まされます。市民一人の力は小さいのですが、その小さな力が集まると想像以上に大きな力を発揮することができると思います。

ところで英国のブラッドフォードやリーズ、そしてロンドンでは、平和に関連した場所を紹介した案内書と地図を市が訪問者に提供しています。京都市もこのような案内書を作成して、もっと平和に関連した所を全国に、そして海外へ紹介したら良いのではないかと考えています。

『戦友会研究ノート』

戦友会研究会著（青弓社　2012年3月刊）

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員　赤 澤 史 朗
（立命館大学法学部教授）

かつて全国に数千あったと思われる戦友会が、今やメンバーの高齢化から相次いで解散の時を迎えている。本書は、高橋三郎他これまで戦友会研究を担ってきた社会学者らのグループが、この戦友会の終末期に当たって調査し刊行した、いわば戦友会の事典である。その項目は、「戦友会と伊藤桂一」（伊藤桂一は兵隊作家）に始まって60項目に及び、その叙述はすべての戦友会の底に流れている共通の性格と、にもかかわらず個別の戦友会ごとによって異なる、多様性の幅を示している。

戦争中の軍隊での結びつきを基に結成された戦友会というと、旧軍時代を懐かしむ右翼的な集団というイメージがある。実際に、毎年夏に全国各地で開催される、反戦の「平和展、戦争展には、戦友会はほとんど関与していない」（187頁）し、他方で「護国神社と戦友会との関係は密接である」（155頁）であるという。

しかしこの研究会の実態調査によれば、戦友会はむしろ私的で非政治的な集団であることを特徴としている。戦友会の結成は、高度経済成長以降の各自の生活が安定した後に、誰か活動的な世話人が生まれて、バラバラになった旧軍時代の戦友の名簿を作った時に始まった。それは戦死した戦友の「慰霊」や、かつて同じ釜の飯を食った仲間の親睦や、昔の思い出話を語る機会を作るというものだったという。だから昔の仲間が集い、語り合う機会である年中行事である戦友会大会の開催が、戦友会組織の最大の目的であるという。

とはいえ戦後の非軍事化の風潮が圧倒的な中で、旧軍時代の結びつきを復活させた戦友会は、客観的には一定の政治的バイアスを持つ集団だったといえよう。靖国神社や護国神社の大きな支持基盤であったことがそれを物語っているし、戦友会の建てる慰霊碑の文言も、昔の戦争肯定の忠魂碑のそれと変わるところがない場合がしばしばであった。

とはいえ戦友会は、特定の政治目的や経済的利益を追求するために結成された団体ではなかった。それは自分たちの若かった時代に、図らずも生死を共にした集団への懐旧の念が、その結集を促しているからである。死んだ戦友へ申し訳ないという説明しがたい感情も、そこには働いている。ある戦友会に参加していた亡父によれば、同期で最も優秀な人こそが戦死したのであった。

本書でハッキリ認識できたことは、戦友会は私的な団体である分だけ、その結びつきも成り立ちもさまざまで、小さな集団から大集団まであることだった。一人の人間が幾つもの戦友会のメンバーとなることも、よく見られるという。戦友会には、軍関係の学校の同期会、同窓会、所属した中隊、大隊、連隊の集まり、特定の兵科（砲兵とか）や艦船（駆逐艦とか）の集団、戦役（ビルマ戦線とか）の結びつきとか、体験を同じくしたといっても、その体験の内容には大きく違いがあるようだ。概していえば上下関係の厳しい軍隊の中で、同期兵の集まりの戦友会が、お互いにフラットな関係で仲が良いという。

戦友会に結集する人々の心理には、生死をかけて戦争に参加した昔の人生の記憶が、敗戦による時代の断絶の中で、戦後社会の中でちゃんと位置づけられなかったという事情があるようだ。「戦後の日本社会は軍事的なるものを一括して全否定するところから出発した」ために、軍隊と戦場の体験者は、「自分たちの体験が納得しうるようなかたちで社会的に意味づけられなかったことにたいする「わりきれなさ」を心の底に沈殿させ」、それが戦友会の結成を促したと、本書では説明している（71～72頁）。

確かに反戦平和を呼びかける戦争展などが、「戦争体験の風化」に抗して「戦争体験」の後代への継承を目ざすのと違って、戦友会に集まる人の中には、「どうせ俺たちの体験は、戦後派の連中には分かりっこないさ」と、敢えてその「体験」の継承を意図しない姿勢があるようだ。どこかで、ふて腐れているともいえるし、その外からは閉ざされた集団である点も、戦友会の特徴といえよう。

ともあれ戦友会のあり方を多方面から描いて、歴史の表面からは隠された戦後史、心性史の流れを追って、新たな発見の多い本であるといえよう。

開催報告
(2012年2月～7月)

今号では2012年2月から7月の間に
開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

第71回
「建物疎開と京都の町」

2012年2月5日(日)～3月20日(火・祝)

「建物疎開」とは、空襲による類焼を防ぐために家屋を取り壊して無人地帯を作る作業の事です。本展では、国際平和ミュージアム所蔵の資料を中心に、京都で行われていた防空対策や、建物疎開の実態を紹介。B29の模型とあわせて展示した京都の航空写真(1945年撮影)からは、五条通や堀川通などが建物疎開によって拡張された様子が見てとれ、「戦時中の疎開体験を思い出した」「建物疎開についてはじめて知った」など、年代ごとに様々な声をいただきました。

※京都市内博物館施設連絡協議会・京都市教育委員会主催
「第17回京都ミュージアムロード」
テーマ：「行ってみよう！京の文化巡り」参加企画

米軍偵察機による京都市街上空の航空写真とB29の模型

第72回
「平和のメッセンジャー ある軍国少年の歩んだ道」

2012年3月28日(水)～4月15日(日)

「死」を強制された軍国少年が、戦後「生」と「愛」を見つめる「平和のメッセンジャー」としてどのような人生を歩み、人々に平和の尊さを訴えてきたのか、古賀哲夫さん（1926年生まれ）の半生を紹介。野外教練の写真や日の丸の寄せ書き、教師時代に「原爆の図」をのせて発行禁止になった学校新聞などの資料を通じて、戦争と平和を考える機会になればと開催しました。

主催：平和のメッセンジャー
古賀哲夫展実行委員会

古賀哲夫さん(1942年)

第73回　開設20周年特別企画
「わたしたちにできること ～震災1年を振り返って」

2012年4月20日（金）～7月15日（日）

東日本大震災の発生を受け、それぞれの立場から行動を起こした立命館大学生の取り組みを紹介する展覧会を企画しました。

●第１期：スリランカからの贈り物 ～平和の祈りの木を咲かせよう～

会期：4月20日(金）～5月20日(日)
企画団体：Happy Factory

2004年スマトラ沖大地震で被災したスリランカの子どもたちが、日本のために描いた絵を紹介。見学の皆さんには、スリランカの子どもたちへ贈るカードを書いて、展示室中央の“平和の祈りの木”に飾っていただきました。

●第２期：震災から一年。気仙沼から同世代へ

会期：5月26日(土)～6月17日(日)
企画団体：公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会

ボランティア体験を学生が自らの言葉で綴ったパネルを展示。気仙沼の20代の声を紹介するビデオも放映しました。

●第３期：被災者×ボランティア？いいえ、宮城のおっちゃんおばちゃんこども×京都の学生

会期：6月23日(土)～7月15日(日)
企画団体：NPO法人 国際ボランティア学生協会(IVUSA)

巨大な大漁旗は復興のシンボル。現地での活動の様子を伝える写真や、“交流の証”として地元の人々からもらったグッズを一緒に展示しました。

放射能と人類の未来

会　期：2012年5月15日(火)～7月27日(金)
会　場：立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
参観者：9,691名
主　催：立命館大学国際平和ミュージアム
監　修：安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
　　立命館大学名誉教授・安斎科学･平和事務所所長）
後　援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
　　京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社
　　京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社
助　成：独立行政法人日本万国博覧会機構

体験展示「バーチャル原発ジオラマ」

関連イベント

公開記念講演会

「放射能リテラシーのすすめ」

日　時：2012年6月10日(日)　13：30～15：30
講　師：安斎育郎氏
会　場：立命館大学衣笠キャンパス　創思館カンファレンスルーム
聴講者：184名

講演会の様子（安斎育郎氏）

「イラクからフクシマへ～放射能汚染地帯を歩いて」

日　時：2012年7月14日(土)　13：30～15：00
講　師：豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）
会　場：立命館大学衣笠キャンパス　充光館301号教室
聴講者：78名

講演会の様子（豊田直巳氏）

国際平和ミュージアムが開設20周年を迎えた今春、2012年5月15日から7月27日までの約2か月半、ミュージアムでは2012年度春季特別展として「放射能と人類の未来」を開催しました。

昨年2011年3月11日の東日本大震災は、津波による未曾有の被害をもたらしたのみならず、福島第一原発の事故により大量の放射性物質が拡散し、1年余りが経過した現在でも健康や環境への影響について人々に大きな不安を与えています。本展では放射線防護学が専門の安斎育郎・国際平和ミュージアム名誉館長の監修のもと、今回の原発事故の正確な事実と原子力発電や原子力政策の歴史をわかりやすく解説するとともに、今後の日本を生きていく上で必要な放射能・原子力について正しい知識を身につけ、環境問題やエコロジーなどの視点を踏まえた未来のエネルギーのあり方についても理解や関心を深められる展示をめざしました。

会場にはパネル展示のほかに、本学映像学部の協力企画として、ヘッドマウントディスプレイを使用した３ＤＣＧで福島原発の内部を立体的に見ることができる映像展示「バーチャル原発ジオラマ」（曜日限定）や、赤外線を使って設定した模擬ホットスポット（放射能の溜まりやすい場所）を探す「バーチャル・ガイガー・カウンター」、組み立て式さいころワークシートを来館者が自身の手で作り、遊びながら放射能について理解を深められるボードゲーム「コロがシティ」などの体験展示も設けました。見学者たちは、目の前で展開する最先端技術によるリアルな立体映像に感嘆の声をあげたり、それぞれの体験展示を楽しみながら、文字情報だけでなく体感的に放射能に対する理解と知識を深めていました。そのほか、本物のガイガー・カウンターを用意し、空気中の放射線量を実際に測ったり、来館者が放射線量を測りたいものを持ち込んで測定できる曜日も設定しました。

また関連企画として、安斎名誉館長と、東日本大震災の写真集も刊行しているフォトジャーナリストの豊田直巳氏を講師に迎え、それぞれ公開記念講演会を開催しました。

6月10日(日)の安斎名誉館長の講演会は定員を超過する盛況ぶりで、講演会冒頭に回収したアンケートの結果を講演中に発表するなど、聴講者の興味を引きつける展開に会場もおおいに盛り上がりました。名誉館長は2時間の講演で最後まで熱意が途切れることなく、過度に恐れることなく正しい判断を下すための知識を身につける「放射能リテラシー」の大切さを説き、聴講者たちも、安斎名誉館長の説く「理性的に恐れる」ことの大切さに熱心に耳を傾けていました。

7月14日(土)の豊田氏の講演会では、氏が撮影した数々の写真と映像をスクリーンに映してのスライドトークの形式で、氏が継続的に取材を続ける福島の“現在(いま)”を報告、湾岸戦争やイラク戦争で使用された劣化ウラン弾の問題なども絡めて、放射能汚染や原発震災の深刻さを訴えました。聴講者たちは、豊田氏がフォトジャーナリストの視線で見つめた被災現地の現状と過酷さ、その臨場感と迫力のある映像と語り口に鮮烈な印象を受けた様子で、スクリーンと氏のトークに引き込まれていました。

特別展見学者の感想より

●放射能について知らないことがたくさんありました。原発について、とても考えさせられました。
（20代男性、本学学生、京都市）

●こうやって幅広くわかりやすく説明していただけると、不安が多少和らぎますね。一人ひとりがちゃんと理解して、前に進めるに必要な展示だったと思います。
（20代女性、大学生、North Carolina, America）

●今、大切な企画だと思います。そのために“知る”ということが大切な第一歩。中学生、高校生が修学旅行などで来館してほしいものです。（50代女性、教育関係者、東京都）

●今、原子力発電が大きな問題になっているので、こうした展示で知る機会が増えることは大事なことだと思う。風聞に惑わされずに、自分から関心を持って実情を知る機会をいろいろな形で提供していくことは、今まさに必要だと思う。
（60代女性、スクールカウンセラー、大阪府）

安斎育郎名誉館長講演会の感想より

●被ばくを防ぐ方法がよくわかりました。原発をやめて、太陽光発電とかの自然エネルギーを使うようになればいいと思いました。100万年後の人に、危険を知らせるのは宇宙人と話をするぐらいむずかしいことだと思いました。
（10代女性、小学生、京都市）

●ふだん聞けないことを聞けたので良かった。放射能に関する知らない知識、真相を知れて良かった。多くの人が知識を持てば今より良い判断が下せて状況が改善されるのではないかと思った。（10代男性、本学学生、滋賀県）

●被災地の復興支援に携わらせていただいている学生にとって、大変勉強になりました。放射能について学ぶことができたので、この経験をこれからの復興支援活動に活用していきたいです。放射能に関する自分の知識、教養はまだまだ未熟ですので、今回の講演はたいへん刺激になりました。
（20代男性、大学生、滋賀県）

●放射能について、かみくだいて解説していただき、とてもわかりやすく、「実態はよくわからないがただ怖い」から、自分自身の中で、もう少しクリアになりました。国民が政府や東電の対応に絶望感を抱いているだけで何もしないというのは、恐ろしいことだと思いました。
（20代女性、会社員、京都市）

●情報の真偽性を判断し、放射能について正しく理解できる一歩にしたいと思います。（40代男性、自営業、大阪府）

●「ベスト」を追求するのに時間をかけるより、「ベターな方法」「現実にできるより良い方法」をめざすべきだと言われることに勇気づけられる。理解できる言葉で難しい話をわかりやすく話してくださって、ありがとうございました。「今回の事故を百年単位で向きあう覚悟をする」ように諭されたことを忘れずにいたいと思います。（50代女性、パート、京都市）

豊田直巳氏講演会の感想より

●今回の講義は衝撃的でした。自分がいつも聞いている情報がどれほど選別されたものであるか痛感しました。可視化された情報と隠された（あるいは見えにくい）情報との格差に驚きました。あまりにリアルで、特に子どもたちの笑顔がつらいです。不覚にも泣きました。1時間半がこんなにも短いと感じたのは初めてにも近いです。もっともっとお話を聞きたかったです。（10代女性、本学学生、滋賀県）

●内容が濃くて1時間半では足りない感じでした。福島とひと言で表しても、放射線の脅威にさらされているところとそれ以外の地域で全然違うことがわかりました。震災ボランティアを通じていろいろ考えたつもりでしたが、知らないこと、衝撃的なことがたくさん知ることができました。ぜひ一度、福島の立入禁止区域に足を運び、自分の目で確かめたいと思いました。（20代男性、本学学生、大阪府）

●現状をその目で見た人だからこそ語れる話、また語る口調にもひかれました。実際の写真や動画を見せながらの話でとてもわかりやすかったです。「1年たっても何も変わっていない」の言葉に納得です。東日本大震災の3か月後、1年後に宮城･岩手を訪問した際に感じたことのひとつに「住民の人々の語る話」と「政府やマスコミの発表する内容」の違いがあります。豊田さんもさまざまな例、具体的な話や写真を用いてその点を指摘されていましたが、放射能や事故のことのみならず、(自分自身も感じている）現代の情報伝達のあり方の問題についても一石を投じる講演で、参加して良かったです。（40代女性、大学院生）

●リアルな情報を現場に足を運んだ人からこそ現実の話を聞けて良かった。イラク、チェルノブイリについての講演会も別々に聞かせてほしいと思うほど内容が盛りだくさんでした。
（40代女性、会社員、京都市）

ミュージアム開設20周年記念事業実施報告

地球市民の記憶と未来。世界へと発信する平和教育の新たな歩み

開設20周年記念式典を開催

国際平和ミュージアムは、「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむ」という理念に基づき、1992年5月19日（創立記念日）、世界で最初の大学立の平和博物館として設立されました。

開設20年を迎えた2012年5月19日に、学園の平和の象徴である「わだつみ像」をおく国際平和ミュージアム（アカデメイア立命21）1階ラウンジにおいて、記念式典を挙行しました。式には、学園関係者、学生・生徒、退職教職員、市民など218名が参加しました。

式典に先立ち、RBC（立命館大学放送局）製作協力による「ミュージアム20年の歩み」DVDが上映されました。続く第1部では、川口清史学校法人立命館総長の挨拶、安斎育郎名誉館長による「国際平和ミュージアムの歩みー世界の平和博物館運動と立命館大学国際平和ミュージアム」と題した報告、来賓として日本平和博物館会議2012年幹事館・前田耕一郎広島平和記念資料館館長による祝辞、有馬賴底師（臨済宗相国寺派管長、金閣寺・銀閣寺住職、京都仏教会理事長）による記念講演「禅の山河」が行われ、出席者は熱心に聴き入っていました。また学術交流協定締結館や国際平和博物館ネットワークからのメッセージが次々と披露されました。

最後に本年4月に就任したモンテ・カセム館長（副総長）より、1992年以来の活動を振り返り、21世紀の平和ミュージアムとして、和解と共生の平和創造をめざす平和博物館づくりによって、立命館の平和教育の理念を社会へと発信し、真の地球市民を育成する教育への貢献をなす学園の教学理念の具現化の場とするため展開していくことを表明しました。

記念式典に引き続いて、2階のミュージアム会議室を会場として開設20周年記念祝賀会が開催されました。加國副館長による司会のもと、来賓の小松昭夫・人間自然科学研究所理事長の乾杯のご発声により祝賀会がもたれました。これまでミュージアムの活動に深く関わってこられた皆さんのご紹介をするとともに、永年関わってこられたボランティアガイドの方々、学生ミュージアムスタッフの皆さん、立命館学園各校の学生・生徒代表も含めて、約130名が参加して交流を深めました。

国際平和ミュージアムラウンジで挙行された記念式典の様子
報告：安斎育郎名誉館長（中央）
上の陶板壁画「火の鳥」（1992年　手塚プロダクション制作）

挨拶：川口清史総長

記念講演：有馬賴底師

謝辞：モンテ・カセム館長

左に「わだつみ像」
（1950年本郷新）
1953年に建立、
1992年にミュージアムに
移設された。
前庭に移植された
「アンネの薔薇」が
満開でした。

国際平和ミュージアム開設20周年記念誌の発行

「立命館大学国際平和ミュージアム　20年の歩み　－過去・現在、そして未来－」(発行日 2012年5月19日)とその別冊である「資料編」(発行日 2012年3月31日)を発刊しました。

開設20周年を記念する出版物をどのようなものにするかは重要な問題でした。①開設からの「年史」を作成する、②記念式典やシンポジウム等、周年事業をまとめる等、いろいろ議論をしましたが、「国際平和ミュージアム」の特徴・強みをいかすものにしようということになりました。

それは、第1に、20年の歩みを振り返りながらその到達を明らかにする、今後どのような分野で、どのような活動を、どのような水準ですすめていくのか、未来を展望する、ことです。

第2はミュージアムの事業・活動に参加・協力いただいた関係者に寄稿してもらうことです。それは、ミュージアムが、本学園の児童・生徒・学生・教職員はもちろん、多くの市民等に支えられて今日の発展があるからです。

そうした思いをタイトルにこめました。また、記念誌の構成も20年間の歩みと到達を記述した本文を軸に、お祝い・メッセージ、コラム・エッセイ、座談会、そして資料編という内容になっています。

本文は、編集委員会メンバー・運営委員が分担し、お祝い・メッセージは内外の平和博物館ネットワークの館・団体(代表者)に、コラム・エッセイはテーマを設定し、その関係者に寄稿をお願いしました。また、座談会は、開設から今日に至るミュージアムの諸事業に「当事者」としてかかわった方々にお願いをしました。

こうして完成した記念誌は5月19日に開催した「開設20周年記念式典」にて配布したほか、協力者(団体)に順次送付しています。本書が平和創造のために活動をされている、教育者･研究者、そして市民の皆さんを励まし、次への一歩をすすめる一助となればと願ってやみません。

なお、本書の内容は可能な範囲で国際平和ミュージアムのホームページにおいても紹介していきたいと考えています。

『立命館大学国際平和ミュージアム20年の歩み
－過去･現在､そして未来－』より

「平和への信念―中野信夫の足跡」展

会期：5月19日(土)～6月17日(日)　会場：1階ロビー

当館の「中野記念ホール」は、中野信夫さん(1910-2010)の名に因んでいます。中野さんは戦後、平和のための市民活動に大きな足跡を残されました。1981年「平和のための京都の戦争展」を呼びかけ、その後の運動の発展、平和のための博物館設立に向けて全力を尽くされました。

今回の展示では、中野さんの平和運動の根底にあった二つの大きな契機について紹介しました。

大阪の無産者診療所時代の1936年、医療の階級格差の問題や医療制度のあり方を問う雑誌『医療と社会』を発行していましたが、検閲で削除された論文を掲載したところ、長期にわたり特別高等警察に留置されました。

その後、1941年に召集、歩兵第百三八連隊に軍医として配属されて、1944年ビルマ（現・ミャンマー）へ派遣されました。後に『靖国街道：一軍医のビルマ戦回想』（1977）にもまとめられたその体験は､戦闘･飢餓・マラリアなど、壮絶で悲惨なものでした。

また、晩年は趣味の絵画にも没頭されており、今回はビルマの人物を描いた3点も展示しました。

ロビーでの展示の様子　　右写真：中野信夫氏

「生き方探求・チャレンジ体験」
～京都市立上京中学校2年生2名を受け入れ～

2012年6月12日（火）から14日（木）までの3日間、京都市教育委員会の主催による「生き方探究・チャレンジ体験」推進事業の一環として、京都市立上京中学校2年生の2名を受け入れ、職業体験を実施しました。

当館の職業体験では、博物館業務の中でもお客さまサービスに係わる部分である受付業務を中心に行いました。来館者へガイドブックの配布、学校団体のグループ見学受付、展示室への誘導、また特別展『放射能と人類の未来』では、“ガイガー・カウンター”体験コーナーで見学者に向けて案内、操作方法の説明などに取り組みました。

京都市立上京中学校2年生の二人

その他に、新聞5紙の平和関連の記事を切り抜いたり、貸出用写真パネルの点検・清掃、学校に持ち帰って配布するために中学生向けミュージアム案内チラシを作成しました。

初めは「緊張します」と言っていた生徒たちですが、どの仕事に対しても真剣に取り組み、「いろいろな仕事が体験出来てよかった」「接客の難しさを知った」と話してくれました。

今年度から体験期間がこれまでの4日間から3日間に短縮されましたが、今回の職業体験を通して学んだことをこれからの生活や将来の仕事選びに活かしていってほしいと思います。また、国際平和ミュージアムとの出会いをきっかけに、「戦争がなければ平和なのか？」「平和とは何か？」について、今後も是非深めて考えてほしいと思います。

貸出用パネルの点検・清掃

海外からのインターンシップ生を受け入れ

立命館大学国際平和ミュージアムでは、海外からのインターンシップ生を初めて受け入れ、5月29日から7月7日の6週間にわたって、アメリカ・ウィッテンバーグ大学のデール・エングルスさんがミュージアムでの業務に就きました。

今回のインターンシッププログラムの獲得目標は、日本語でのコミュニケーション能力を向上させ、日本のオフィス環境やビジネス日本語を学ぶこと、平和について学習することでした。

デール・エングルスさんと今回作成した英語チラシ

獲得目標に基づいて、①ミュージアムのチラシの英語化、②特別展解説パネルの英語化、③ボランティアガイド活動の理解・日本語と英語でのガイド実施、④特別展の受付・接客ほか、さまざまな業務に携わりました。

これまでなかった英語チラシの作成は、デールさんも印刷業者との打ち合わせに加わるなど積極的に取り組み、このインターンシップの期間に納品まで完了させました。

このミュージアムでのインターンシップで得た経験をもとに、今後も活躍していってほしいと期待しています。

私は立命館大学国際平和ミュージアムで5月の終わりから7月の頭まで、アメリカから来てインターンシップをしたデール・エングルスです。この6週間、チラシを英訳したり、学生が英訳した特別展の原稿を点検したり、ガイドや接客したりしたので、とてもいい経験になりました。日本語能力が向上し、日本での事務室環境を体験し、ミュージアム管理や平和について学んだので、とてもよかったと思います。これから、山梨県の甲府市で英会話の先生として働くので、ミュージアムで学んだことを生かして、国際交流を広げ、平和を創造するために頑張って生徒を教えたいと思います。ミュージアムの皆さん、まことにありがとうございました！

（インターンシップ生　デール・エングルス）

来館者80万人記念セレモニーを開催

立命館大学国際平和ミュージアムの通算来館者数が80万人を達成したことを記念して、2012年5月22日（火）、午前11時45分よりセレモニーを開催しました。今回、記念すべき80万人目の来館者となったのは、奈良市立富尾第三中学校の2年生の皆さん69名でした。

セレモニーの最初に、国際平和ミュージアムを代表して、2012年4月に就任したモンテ・カセム新館長（立命館大学副学長）から記念の挨拶があり、今後の継続的な平和学習を期待するメッセージを生徒たちに送りました。その後、モンテ・カセム館長から生徒代表の中原美結さんに、来館80万人の認定証と記念品（開設20周年記念クリアファイル）が手渡され、会場は大きな拍手に包まれました。

認定証授与の様子

認定証授与の後、代表の中原さんより感謝の言葉とともに、「平和であることの大切さ、ありがたさを感じ、世界のすべての人々が平和に安心して生活できるために私たちができることを考え、さらに平和学習について深めていきたい」と述べられました。

その後、大きなくす玉がつるされた常設展示室入り口に場所を移し、生徒代表4名によってくす玉が割られると、中から「祝 来館80万人目おめでとう！」と書かれた垂れ幕と一緒に紙吹雪や風船が舞い、集まった人々から一斉に歓声があがりました。

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年5月19日「世界初の大学立の平和博物館」として開設いたしました。今年2012年5月19日には開設20年を記念して、「開設20周年記念式典」を開催しました。過去にも節目ごとに記念セレモニーを行ってきましたが、毎年5万人前後の来館者を迎え、その半数以上が小・中学校、高校など400校以上の学校団体の見学者で占められています。

改めて戦争と平和の歴史を知り、戦争や兵器の問題だけではなく、世界の人々が自分の能力を充分に発揮できる社会を目指し、平和創造のあり様を共に考える場とするため、関係者一同、今後もより魅力ある平和ミュージアム作りに邁進してまいります。

記念セレモニーに参加した富尾第三中学校の生徒たち

過去の記念セレモニー

●来館30万人記念セレモニー
2001年4月28日　広島県　府中市立南小学校
30万人記念認定書を贈呈

●来館40万人記念セレモニー
2003年11月18日　京都府　京都市立金閣小学校
認定証、火の鳥パズルを贈呈

●来館50万人記念セレモニー
2006年6月27日　宮崎県　宮崎市立久峰中学校
認定証、記念ストラップ・クリアファイルを贈呈

●来館60万人記念セレモニー
2008年7月16日　京都府
ヴィアトール学園洛星中学校
認定証、記念写真立てを贈呈

●来館70万人記念セレモニー
2010年6月4日　三重県　津市立大井小学校
津市立誠之小学校、津市立波瀬小学校
認定証、記念ペーパーウエイトを贈呈

甲州市立塩山中学校がミュージアム見学と平和集会を開催

4月26日（木）、山梨県甲州市立塩山中学校3年生生徒・教員172名が、ミュージアム見学と平和集会を行いました。これは同校の生徒が1年生から学んできた平和学習の集大成として、京都・奈良への修学旅行の締めくくりに、「わだつみ平和文庫」※ の起源である『日本戦没学生の手記』が収められている国際平和ミュージアムを訪問し、平和の尊さや学ぶことの大切さを再確認することとして開催されました。

最初に、小関素明・文学部教授（前副館長）による講義「立命館大学国際平和ミュージアムの役割―「平和」への関心の触発」を聴講。小関教授は、普通の人々をも否応なく戦争に巻き込んでいく国民総動員体制のなかで、学生・生徒も例外ではなかった一五年戦争下の時代背景を話し、「おかしいと感じたときに声をあげることを忘れないで欲しい」と行動することの大切さを語りました。

平和講義を聴講する塩山中学校の生徒

続いて、生徒たちはクラスごとに常設展示見学とわだつみ平和文庫の寄託資料を見学しました。常設展示室「国民総動員」のコーナーでは、「出征兵士の留守宅で養蚕を手伝う山梨塩山国民初等科の子どもたち」（撮影：林忠彦）が展示されており、食い入るように1枚の写真を覗き込む生徒たちの姿がありました。

見学後、中野記念ホールで学校主催による平和集会（生徒による平和への願いを込めた合唱や群読の発表）が開催されました。集会では、来賓として出席された「わだつみ平和文庫」代表の中村はるねさんが挨拶、平和学習の継続により、平和の大切さを訴え続けることの大切さを語りました。最後に、2012年4月より国際平和ミュージアム館長に就任したモンテ・カセム館長（立命館副総長・国際担当）による講評が行われました。カセム館長は、自身の出身国であるスリランカの内戦や世界各地で起こる紛争について言及し、「平和にとって教育がいかに大事であるかということを、平和である日本では忘れがちです。今一度、教育の重要性への理解を深める必要があります。人を役職、身分、国籍や偏見で評価するのではなく、その人の行動で評価する、本物を見極める思考を身につけるためにも教育は非常に重要です」と、平和にとって教育の果たす役割の重要性を語りました。

生徒たちからは「平和で学べることの大切さを再確認できた」「勉強ができることに感謝して学業に励んでいきたい」との声が多数寄せられ、平和への思いを新たにした集会となりました。

※わだつみ平和文庫（中村徳郎・克郎記念館）は、戦没学徒兵の手記『きけわだつみのこえ』編者の故中村克郎さん（2012年1月に逝去）が集めた資料を展示するため、2008年10月25日に山梨県甲州市塩山上於曽に開館された。『きけわだつみのこえ』の原点となった、戦死された克郎氏の実兄・徳郎氏の手記や写真のほか、戦争や平和に関する書籍や映像など約3万3千点が展示されている。

平和集会で合唱する生徒

2011年度　資料・図書などの寄贈者一覧

2011年度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。
お名前を記し、感謝の意を表します（敬称略・50音順）。

資料

青木　敬之
新井冨美郎
荒木　典寿
市村　　司
井上　大藏
井上　正雄
岩井　弘光
岩崎美枝子
浦岡　　健
治部　康利
川越　悦子
川﨑　渉三
木下　一樹
草野　敏彦
小森千賀子
谷　　正昭
玉井香奈恵
田村　善昭
徳原　修一
中島　伸江
仁張　春来
人見　潤介
平河　弘康
平塚真美子
布川　庸子
福村　雅宏
藤澤　彰子
増田　正明
松本須美子
宮下　明大
矢谷　邦雄
吉原　良雄

図書

安斎　育郎
飯田　　勇
池田　錬二
一芝　竹夫
伊藤　　昭
桂　良太郎
桐畑　米蔵
粉川　英夫
志岐　常正
重松　正一
多田　敏宏
ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン
寺内　邦夫
鳥羽　洋子
鳥井　真木
西山　勝夫
朴　　孟洙
服部　　素
人見　潤介
福島　在行
福村　雅宏
福林　　徹
藤岡　　惇
村田　茂樹
柳生研太郎
山辺　昌彦
団体　122団体

※以上、掲載の許可をいただいた方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

第4回 沖縄県平和祈念資料館

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE
日本平和博物館会議（ロゴマーク）

住民視点の沖縄戦をテーマにした平和祈念資料館

沖縄戦において多くの尊い命とかけがえのない文化遺産のほとんどを失った沖縄県が、沖縄戦の悲惨さを伝え、平和の大切さを訴えることをテーマにした平和祈念資料館を設置したのは、戦後30年目、復帰の年から３年後の1975年です。平和祈念資料館は都道府県立では国内初の「戦争と平和」をテーマにした施設です。

沖縄では、砲弾が絶え間なく降る（鉄の暴風）大地を右往左往し、阿鼻叫喚の中を逃げ惑った人々の様子を語る「モノ資料」は殆どありません。そこで、重要になったのが、鉄の暴風をくぐって九死に一生を得た人々の記憶でした。当館では「住民が巻き込まれた戦場における生き様と死に様」を、「住民証言」という形で文字にして展示を構成しました。

沖縄戦の実相を展示する事とあわせて平和学習の拠点としての機能を充実させ、2000年に移転改築しました。子どもたちが沖縄戦の実相を知り、広く世界に目を向け、世界にある平和を驚かす様々な問題に気づき、感じ、理解し、調べ、平和創造の行動に繋げるきっかけ作りに工夫を凝らしています。

展示内容

資料館の展示内容は、１階の子ども・プロセス展示と２階の戦前・沖縄戦・戦後に関する展示があります。沖縄戦の展示は、住民の視点から見た、沖縄戦の実相を後世に伝える展示を心がけています。第１室は、沖縄戦に至るまでの沖縄の歴史や戦争がなぜ起こったのかを展示。第２室は沖縄戦の実相を住民の視点から描く。被災状況を立体地図や映像・実物等で展示。第３室は、沖縄戦で住民の受けた惨劇を地下（ガマ）と地上（死の彷徨）で象徴的に展示。第４室は沖縄戦の体験を証言集と証言映像で展示。第５室は、戦後の収容所生活、27年間の米軍統治、復帰運動、平和創造を目指す沖縄を展示。１階には、未来を担う子どもたちが、積極的に平和を愛する心を育むための子ども・プロセス展示室と図書・雑誌の閲覧等のできる情報ライブラリー（１階の施設は利用無料）があります。

常設展示以外でも、今年度は、絵本画展「絵本（エー）が語りつぐ戦世（イクサユー）」、特別企画展「沖縄人（ウチナーンチュ）が見たイクサ世とアメリカ世（ユー）」、「子ども・プロセス企画展（年４回）」、「児童・生徒の平和メッセージ展」を開催致します。

展示以外の活動

当館は「一人でも多くの戦争体験者から証言を収録することによって、沖縄戦の実相を後世に伝える資料とする」という目的で、戦争体験者の証言を収録しています。常設展示第４室ならびに1階情報ライブラリーでは、約600人の証言映像を見ることができます。この証言映像は、県内外の人々により深く、沖縄戦の実相と平和の尊さを伝えるために貸し出しを行っています。「沖縄平和学習アーカイブス」としてインターネット上でも公開（72点予定）しています。

沖縄県平和祈念資料館

今年度は、復帰40周年事業として、50名の証言の収録と、県民参加型の「子や孫に語る平和のウムイ（思い）事業」として300名の証言を募集し、公開する予定です。

また、当館は図画･作文･詩を募集する「児童･生徒のメッセージ」を開催しています。この事業は、①沖縄戦の体験と教訓を次の世代へ語り継ぐ、②沖縄の視座から平和を発信するという資料館のねらいを最も良く体現する事業です。子どもたちは作品作りを通して“沖縄のこころ”を継承します。

子どもたちの作品には、身近な方の体験談、沖縄戦の状況を今に留める多数の痕跡、基地と不発弾の不安な日常などから平和について深く考え、未来への希望を描き、平和を愛するこころ、平和を創造していこうとする力強い意志などが表現されていて、県民から高い評価を得ています。慰霊の日の「沖縄全戦没者追悼式」において、詩部門最優秀賞作品が「平和の詩」として朗読されています。

八重山平和祈念館

当館は石垣市に分館として「八重山平和祈念館」があり、八重山の住民が、日本軍の指示・命令によってマラリアの有病地に避難・退去させられ、マラリアの犠牲になった「戦争マラリア」の実相や戦後のマラリア根絶までの努力を、写真、実物資料等により展示・解説しています。

当館及び八重山平和祈念館は、一人でも多くの方に「沖縄戦」の実相を伝え、そして、世界の平和について考える“場”として活用していただきたいと考えております。

基本情報
◆館長　呉屋禮子
◆〒901-0333　沖縄県糸満市摩文仁614番地の1
TEL.098-997-3844　FAX.098-997-3947
◆ＨＰ　http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/
◆開館時間　9:00～17:00
（2階常設展示室への入室は、16:30まで）
◆入館料　大人300円（団体240円）
子ども150円（団体100円）

京都に国際平和ミュージアムがあってよかった

立命館大学国際平和ミュージアム
ボランティアガイド・平和友の会　村尾　孝

さる5月19日「立命館大学国際平和ミュージアム開設20周年記念式典」が催行されました。私達「平和友の会」は、お祝いの席に加えていただきました上に、安斎名誉館長の「20年のあゆみ報告」の中で、“当ミュージアムの基本的な考え方”の一つ“市民・学生と共にある社会開放施設”の項で、“「平和友の会」など市民や学生ボランティアとの共同”について報告していただきました。また、祝賀会の席でも、司会者から紹介をしていただくなど、過分な光栄に感謝し、心から20周年をお祝いし、喜び合いました。

さて、「平和友の会」は、ミュージアム開設の翌1993年の「ボランティアガイド養成講座」の受講生が創立し、ガイドは94年1月から試行、4月から本格実施して今日に至っており、来年には20周年を迎えます。

振りかえりますと、私達の活動は、当ミュージアムの発展と共にありました。ミュージアムは、最近の年間来館者約5万人を数え、5月22日には来館者80万人となりました。これに相応する私達のガイド活動は、その6割の年間約3万人（依頼のあった約500の学校・団体等）に及び、94年度の年間約8千人の約4倍に増加しております。

“10年ひと昔”といいますが、世の中は大きく、かつ最近では目まぐるしく変っております。この20年間、私達一介の市民が、たゆみなくボランティアガイド活動ができたのは、“平和と民主主義を教学理念”とする立命館大学の“世界で唯一といえる大学のもつ国際平和ミュージアム”であったればこそと思っています。

20年前、第1回の養成講座を受けて、現場に一歩を踏み出すのをためらう私達に、当時の安斎館長代理が言われました。「戦争をするのがよいとさえ言わなければよい」と…。これが、自由な市民としてのガイド活動の背中を押し、今日も生き、継がれております。私達は、押しつけやマニュアル的なものにとらわれない、それぞれが個性のあるガイド活動に努めております。今では、「戦争がなければ平和ですか」と語れるようになりました。

その中で、私自身は、展示の説明文を読み込むこと、これが多くの立命館大学の先生達が練り上げられた社会へのメッセージと考え、これをベースに小・中・高・大学生や社会団体等の多様な年齢層の方、それぞれに分り易く解説するように努めています。

当然のことながら、当ミュージアムへおいでになる方々の大部分は、上述のメッセージを広く深く受け止めていただいているのですが、一方、稀には肯定できない方もおられます。私は、ご意見のあるのも当然として、その趣は承りますが、真っ向からの議論はせずにボランティアガイドとして館にお伝えし、所用のノートに記載されるよう勧めております。その方だけに関わっておれば、団体のほかのすべての方へのガイドが疎かになって本務に沿わないための措置ではありますが、私の白髪頭に免じてか、たいていは“戦争をしてはいけない”ことに同意してお帰りになります。

最も多い修学旅行や校外学習では、年間授業の一環としての位置づけを明確にした来館には、ガイドをする当方も自然、力が入ります。また、研修として定期的に来館される会社や社会団体、夏期のレポート作成に定例的に学生を寄こされる学校もあります。

留学生や外国からの来館者には、“日本にこのような国際平和ミュージアムがある”と知っていただく喜びや誇りを感じます。中国の中央電視台（テレビ局）の取材では、“一五年戦争での加害、植民地・占領地支配、戦争責任等”だけでなく、カメラを日本の平和憲法に向けていただこうと事務局の方とも相談し、安斎館長（当時）のメッセージを、“9条の大タペストリー”の前でしていただき、草の根の日中友好の中国の老朋友から「見たよ」と知らせてくれたこともありました。

“日本に京都があってよかった”のコピーに、私の“京都に国際平和ミュージアムがあってよかった”を加え、ミュージアム開設20年を祝う、“ボランティアは他人のためでなく、自分のためであること”が身に沁みる齢となった老ガイドの感謝の言葉とさせていただきます。

常設展示見学者の感想（2011年11月～2012年7月）

3.11以降、自分たちはこれまでの生活をふり返り、これからをどうしていくのか考えなければいけないと感じています。来館して、知らないことがたくさんあることを痛感しました。自分に何ができるのかはわかりませんが、歴史から学んで、社会をつくる１人として考え、行動していこうと思いました。

男性　30代　東京都

はじめて爆弾を見られてよかったです。学校でムッちゃんの事について教えてもらっていたので、ここに来てムッちゃんの像を見たときよく分かりました。

男性　小学生　三重県

修学旅行の引率で来ました。教え子たちが将来戦火に巻き込まれることだけは、何としても避けたいです。大人である私達のあやまちを子供たちに押し付けるのではなく、何らかの行動を起こす事が大切だと感じました。毎回ボランティアの方の生の声、ありがたいです。戦争を知っている人の声を重く受けとめたいです。

女性　50代　三重県

資料の数がとても多く、一つの題材を様々な国の視点から、くわしく説明している点も良かったです。戦争に対しての、生々しい記述や写真に心が痛むのを感じながらも目を背けてはいけないと自分に言い聞かせながら見学させていただきました。

男性　大学生　京都府

はじめて日本で戦争について、日本の教科書にのせた歴史以外の話を聞きました。世界各地の教科書を展示しているところが一番印象的でした。友たちにもこのミュージアムを紹介してあげたいと思います。

女性　大学生　台湾

これからも平和について色々な世代に教えてほしいです。戦争を経験した世代としなかった世代すべての人々に平和とは何か？ということを教えさせて下さい。これからも頑張ってください。

男性　10代　滋賀県

ボランティアの方がグループに分かれて説明をして下さりありがとうございました。ボランティアの人数にもよると思いますができれば数人のグループで説明して頂くとよく分かると思います。説明をされるボランティアの方の見学者の経験から学ぶ姿勢はとても良かったと思います。

男性　60代　長野県

日本にもこのような視点で平和を訴えかける展示館があり嬉しいです。このような視点での展示は反対勢力からの圧力もある事を想像しますがぜひ多くのかたに見ていただきたい施設だと思いました。

男性　50代　千葉県

戦争が悲惨で残酷だという事は誰もが知っている。故に具体的な被害に言及していた点はすばらしい。また、なぜ国際社会で日本がアジアに非難されているかも詳しく説明すべきだと思う。愛国心や戦争協力といった戦後の部分にも着目してより資料を充実させて欲しい。

男性　20代　奈良県

ガイドさんによって、話していただける内容が違うので、来るたびに異なった視点で展示を見ることが出来て新たな学びとなっています。これまで受けてきた授業等で培った知識も踏まえて、これからの世界のなり方等を考えなければならないと思いました。

女性　20代　兵庫県

私は公立校で高校までを過ごしたので、「加害者としての日本」についてはほとんど学ぶ機会がありませんでした。又、その時代を生きた祖父母もかつてのつらい経験をなかなか話してくれずに他界しました。このような学びの場はとても大切だと思います。遠くからでも訪れる価値は十分あり、ゆったりと見られて良かったです。

女性　40代　神奈川県

戦争のこわさ、危険などが多く書かれていたりしました。中には見たくないような絵もありました。戦争によりケガした人などの絵。でもそれは、自分達人間です。無くすのも人間です。戦争をなくすためには、自分もふくめ今生てる人々が協力しないといけない事がわかりました。

男性　中学生　京都府

ＮＧＯやユニセフなどは少しでも世界が平和になるように努力している傍ら、核兵器はなくならず、開発がすすめられ、利益欲しさに残酷なことをたくさんする。だから誰かが欲望に勝ち、みんなの過ちに気づかせなければならない。私はきっとそんな人になりたい！と思うことが出来た。この施設にもっとたくさんの人が訪れ、私と同じような決心が出来るような素敵な場所になってほしい。

女性　10代　茨城県

5月に私が勤務している中学生（2年生）の校外学習でこのミュージアムを見学させていただきます。平和について幅広い資料とその内容に驚きました。これからも平和に対する発信地の一つとして大いに期待しております。

男性　50代　奈良県

とてもわかりやすくまとめられていた。短いじかんで回りきれないのがざんねん。

男性　10代　和歌山県

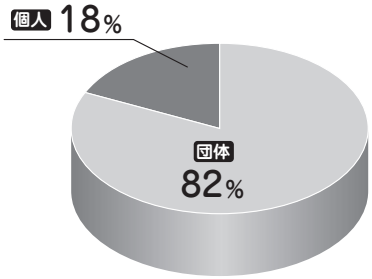
※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2011年4月 ～2012年3月 入館者状況

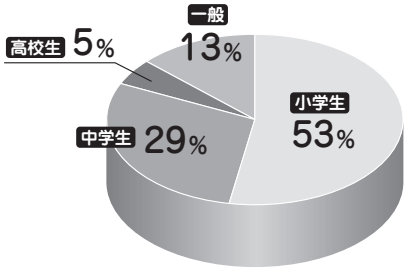
◎開館日数　292日

◎オープン後常設展入館者数累計　794,016名

＜有料団体・個人入館者状況＞



＜有料団体入館者数状況＞



2011年度 月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数計(名)
総入館者数	2,725	4,604	4,915	2,509	2,971	2,990	9,531	8,350	2,973	868	1,398	1,103	44,937

特別展	春季特別展　『世界187の顔ー生命（いのち）の現場からー』	(5/17～7/10)	7,909
	特別展　『世界報道写真展2011 ―WORLD PRESS PHOTO 2011―』		12,457
	京　都（立命館大学衣笠キャンパス）	(9/21～10/16)	(7,065
	滋　賀（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）	(10/18～11/3)	2,669
	大　分（立命館アジア太平洋大学）	(11/6～11/20)	2,723)
	秋季特別展　『プリーモ・レーヴィ ―アウシュヴィッツを考えぬいた作家ー』	(10/22～12/17)	12,715
	小　計		33,081
特別展示	写真展「東日本大震災の現場から」第1弾	(5/17～6/19)	オープン
	写真展「東日本大震災の現場から」第2弾	(6/21～7/30)	オープン
	特別展示「ベルタ・フォン・ズットナー展」	(8/10～8/28)	オープン
	第58回不戦のつどい協賛企画　わだつみ平和文庫資料寄託記念「わだつみ　不戦の誓い」展	(12/9～12/17)	オープン
講演会ほか	日独交流150周年・DAAD友の会創立25周年記念-DAADアルムニ会学術シンポジウム・平和コンサート （創思館カンファレンスルーム、中野記念ホール）	(4/16)	134
	第5回国際平和・人権連続セミナー　（びわこ・くさつキャンパス　R-103教室） アレクサンダー・オルブリッヒ氏（大阪・神戸ドイツ連邦共和国領事館総領事）『国際平和構築と科学兵器禁止条約』	(5/10)	52
	「世界187の顔」公開記念講演会　（衣笠キャンパス　明学館94号教室） 山本宗補氏 (JVJA会員、「fotgazet」創刊号編集長）『世界187の顔から見えてきたもの』	(5/24)	218
	DVD上映＆レクチャー「カティンの森」（国際平和ミュージアム　2階会議室） ラドスワフ・ティシュキェヴィッチ氏（駐日ポーランド共和国大使館一等書記官）	(6/29)	38
	特別講演「福島原発から何を学ぶか？ー二度の現地調査をふまえて」安斎育郎名誉館長（衣笠キャンパス　明学館96号教室）	(6/29)	203
	NGOワークショップ「国際交流と平和ー世界とつながる　世界とつなげるー」（国際平和ミュージアム　2階会議室） 中沢聖史氏（国際交流NGO・ピースボート、国際部通訳コーディネーター）	(7/16)	14
	第6回国際平和・人権連続セミナー　（衣笠キャンパス　明学館96号教室） 大田昌秀氏（元沖縄県知事、前参議院議員、大田平和総合研究所主宰）『沖縄戦と在沖米軍基地問題を考える』	(7/20)	182
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？？2011　（国際平和ミュージアム　2階会議室）	(7/22、7/31)	38
	下見見学会	(5日間・7/27、8/18、8/19、8/23、8/24)	76
	特別展示「ベルタ・フォン・ズットナー展」公開記念講演会　（国際平和ミュージアム　2階会議室） ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士（INMP統括コーディネーター、ブラッドフォード大学客員教授） 『ウィーンにおけるベルタ・フォン・ズットナー平和博物館創設に向けて』	(8/20)	50
	ワークショップ「ミリタリーをどうするかーガルトゥング博士とともに考えるー」（中野記念ホール） ヨハン・ガルトゥング博士（平和学者）	(9/16)	128
	「世界報道写真展2011」公開記念講演会		
	【京都会場】豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）『3・11を記録し、記憶するために』（衣笠キャンパス 存心館801号教室）	(10/4)	171
	【滋賀会場】國森康弘氏（フォトジャーナリスト）『3・11被災地、紛争地から看取りまで～命のバトンを受け継ぐために』（びわこ・くさつキャンパス　エポック立命21ロビー）	(10/18、11/3)	137
	アジア太平洋平和研究学会2011年研究大会（APPRA）（国際平和ミュージアム、創思館カンファレンスルーム）	(10/14～10/16)	881
	NGOワークショップ「環境保全NGOシリーズー持続可能な未来を作ろう！ー」（国際平和ミュージアム　2階会議室）		
	第1弾　NGO気候ネットワーク　豊田陽介氏（気候ネットワーク主任研究員）	(10/21)	12
	第2弾　NGO日本ナショナル・トラスト協会　中安直子氏（ナショナル・トラスト推進部長）	(10/23)	14
	「プリーモ・レーヴィ」公開記念講演会（国際平和ミュージアム 1階ロビー）コーディネーター：加國尚志副館長（立命館大学文学部教授）		
	第1弾　竹山博英教授（立命館大学文学部）『プリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬくことー』	(11/5)	105
	第2弾　徐京植教授（東京経済大学現代法学部）『断絶の証言者プリーモ・レーヴィ』	(11/12)	138
	第3弾　鵜飼　哲教授（一橋大学大学院言語社会研究科）『"人間であることの恥"ふたたびー2011年の経験からー』	(11/19)	80
	長崎青少年ピースボランティア交流事業（国際平和ミュージアム　2階会議室、常設展示室） プログラム：ミュージアム見学、平和講義、活動交流会	(12/10、12/11)	23
	第7回国際平和・人権連続セミナー　（国際平和ミュージアム　2階会議室） ヴィクトル・アレクセーヴィッチ・シャライ氏（沿海州国立アルセニエフ博物館館長（ロシア）） 『世界平和と諸民族の友好をめざす沿海州国立アルセニエフ博物館の活動について』ー沿海州地方での日本人捕虜の生活に関してー	(1/13)	60
	小計		2,754

編集後記

国際平和ミュージアム開設20周年記念式典も無事終了しました。支援してくださった皆様に御礼を申し上げるとともに、多くの市民の方々のご協力を仰ぎながら、さらなる10年へ向けてスタートしたいと思います。春季特別展「放射能と人類の未来」では、現在まさに問題となっている放射能の問題を取り上げるとともに、バーチャル・リアリティを導入した体験型の展示を行うなど、国際平和ミュージアムとしても新たな試みを行いました。今後も、こうした新しい試みに挑戦しながら、充実した展示経験を持っていただくように努力をしていきたいと思います。

秋季特別展「未完の作品／永遠の始まり　無言館収蔵作品から芸術の原点を考える」では、長野県上田市の戦没学生慰霊美術館「無言館」の協力のもと、絵画・芸術作品から平和の意味を考える試みを行います。今後も、大阪など近隣の府県をはじめ多くの平和博物館との連携・協力を強化し、来館者が平和について考え、資料や展示を体験する平和学習のネットワークを形成していきたいと考えています。歴史に誠実に向き合うことが未来の創造につながるという理念を共有する人々が自治体の枠を超えて手をつなげば、とても大きな力になるはずです。

国際平和ミュージアムの新しい10年は、展示企画や資料の充実とともに、平和博物館の連携を築くスタートでもありたいと思います。

加國尚志

※　本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はおやめください

ミュージアムインフォメーション

2012年度秋季特別展

開設20周年記念

未完の作品／永遠のはじまり ―「無言館」収蔵作品から芸術の原点を考える

会　　期：2012年10月23日（火）～12月1日（土）
会　　場：立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
休 館 日：月曜日、11月24日（土）
参 観 料：大人400円（350円）、中・高生300円（250円）
　　小学生200円（150円）

※常設展もあわせてご覧いただけます。上記（　）内は20名以上の団体料金です。
※関西文化の日 11月17日（土）・18日（日）は入場無料です。

太田章≪妹・和子の像≫

開催趣旨

立命館大学国際平和ミュージアムには、戦没画学生の遺作を集めた「無言館」/京都館ーいのちの画室（アトリエ）があります。戦没画学生慰霊美術館「無言館」は、長野県上田市にあり、野見山暁治さんと窪島誠一郎さんが、戦争のため画業半ばにして倒れた画学生たちの遺作を集めた美術館です。今秋、国際平和ミュージアムは、「無言館」から収蔵作品や画学生が愛用した品々などを借受け、「芸術の原点」を考える展覧会を開催します。

本展では、これら戦没画学生の遺した「未完の作品」の中にこそ、「絵画とは何か」「なぜ絵を描くのか」「人間にとって芸術とは何か」という問いかけが含まれているという観点に立ち、各作品を「芸術の原点」として捉えた展示に挑戦します。

主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画協力：一般財団法人　戦没画学生慰霊美術館無言館
後　　援：長野県、京都府、京都市、京都府教育委員会
　　京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
　　NHK京都放送局、ＫＢＳ京都、朝日新聞社
　　京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社
　　京都工芸繊維大学、京都市立芸術大学
　　武蔵野美術大学（予定）

戦前の東京美術学校、授業風景

関連企画　公開記念講演会　**「無言館」のこと**

聴講無料・申込不要

日　　時：11月11日（日）14：00～16：00（開場13：30）
会　　場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー
鼎談（ていだん）講師：野見山暁治（洋画家）
　　窪島誠一郎（「無言館」館主）
　　安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
　　安斎科学・平和事務所所長）

「無言館」外観（長野県上田市）

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

世界報道写真展2012 ～WORLD PRESS PHOTO 2012～

開催趣旨

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約170点で構成した写真展で、今年で55回目を迎えます。4月のオランダ・アムステルダムを皮切りに世界45の国と地域、約100の会場で開催される世界規模の写真展です。いま、この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。時に命がけで撮影された報道写真を間近でご覧いただくことで、世界の現状を知り、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにしていただきたく開催するものです。

【京都】

会　　期：2012年9月19日(水)～10月14日(日)
　　※休館日：9/24(月)、10/1(月)、10/9(火)
会　　場：立命館大学国際平和ミュージアム　中野記念ホール
開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円
公開記念講演会：
　日　　時：2012年10月9日(火)14：40～16：10（公開授業）
　会　　場：立命館大学衣笠キャンパス　以学館4号教室
　講　　師：恒成利幸氏
　　（朝日新聞社　写真部、「一般ニュース」の部　単写真3位入賞）

〔世界報道写真大賞〕
サムエル・アランダ（スペイン／2011）
イエメンのサヌアでサレフ大統領に対する抗議の最中に負傷した息子を抱きかかえる女性

【滋賀】

会　　期：2012年10月16日(火)～11月1日(木)（会期中無休）
会　　場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）　エポックホール
開場時間：9時30分～16時30分（入場は16時まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円
公開記念講演会：
　日　　時：2012年10月16日(火)第1回12:15～13:00、第2回13：30～14：15
　会　　場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス　エポック立命21エントランスロビー
　講　　師：恒成利幸氏（朝日新聞社　写真部、「一般ニュース」の部　単写真3位入賞）
（京都・滋賀開催分）
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団
後　　援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会
　京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
　NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS京都
　滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会
　NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社
協　　賛：キヤノンマーケティングジャパン株式会社

恒成利幸氏

講師履歴紹介

朝日新聞社写真部在籍。
1968 年大阪生まれ。
1987 年朝日新聞社入社。
東京写真記者協会で３度の受賞歴があるほか、九州写真記者協会での受賞もある。

【大分】

会　　期：2012年11月4日(日)～11月18日(日)（会期中無休）
会　　場：立命館アジア太平洋大学（APU）　本部棟2階　コンベンションホール
開場時間：10時～17時（入場は16時30分まで）
参 観 料：大人500円、高校生以下無料
主　　催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団
後　　援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会、大分県
　別府市、大分県教育委員会、別府市教育委員会、NHK大分放送局、大分合同新聞社
協　　賛：キヤノンマーケティングジャパン株式会社、別府商工会議所、社団法人別府青年会議所
協　　力：大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

第20巻第１号（通巻56号）　2012年８月24日発行

立命館大学
国際平和ミュージアムだより
編集・発行
立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075-465-8151　FAX. 075-465-7899
http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html